

# LEAVING THE PUBLISHING SYSTEM



FERDINANDO FREGA

# 出版システムからの離脱

*Roots & Memory*シリーズ第9巻：出版システムから完全に離れることをめぐる短い調書——許可なきアクセス、無償の配布、そして見つけられるのを待たずに生み出す規律。

## 奥付

### **Ferdinando Frega — Nando the Scribe — The Fifth Blade**

行動コードの物語の先駆者。ひとつの考えを軸に、1ドルの出版エコシステムを築いた。金融が抱えているのはお金の問題ではない。行動の問題である。

ONEDOLLAR-STORIESのエコシステムの中で編集・監修。  
デジタル・アーキテクチャ：NAPLES-POST・  
NOASPECTTIME・ONEDOLLAR-STORIES。2026年初版。デジタルでの読書に最適化された、簡潔でモダンな組版。アメリカ合衆国で刊行。

## 著作権表示

© 2026 Ferdinando Frega / Frega Editore. CC BY-NC-ND 4.0のもとでライセンスされています。

## 無料アクセス

### 編集者ノート

この本は無料である。Ferdinando Fregaが書いたすべての本と同じように。戦略としてではない。宣伝のための身振りとしてではない。市場の判断としてではない。

無料である理由はただひとつ。文学は喜びであり、読むことに値段はないからだ。

書かれた言葉は、自律した思考となる考えを伝えることのできる唯一の道具であり続けている——操作でも、転換でも、消費のために作られた製品でもなく。

この本を読み終えたとき、あなたの内に残るものはあなただけのものだ。誰かがそれをそこに置いたのではない。あなたがそれに気づいたのだ。それこそが、この作品が求める唯一の取引である。

Ferdinando Frega — Nando the Scribe、Naples-Post、2026年

### **批評的論説**

このプロジェクトは伝統的な読者を求めない。代わりに、適応も妥協もせずに構造を支えられる者を選ぶ。ここで読者は闘となる——慰めや譲歩を求めずにテキストと向き合う覚悟のある者だけが通れる闘に。

### **闘としての読者**

読者は顧客でもフォロワーでもなく、存在への挑戦である。テキストに正面から向き合う者だけが入ることができる。それはエリート主義ではなく、生き残りの問題だ。作品は好みではなく、耐える力によって選ばれる。

### **出版システムの拒絶**

このプロジェクトは、注目のための最適化、感情の操作、アルゴリズム上の可視性、市場に駆り立てられた単純化を拒む。流行を追わず、マーケティングの論理に合わせず、業界

のリズムの中に居場所を求めない。システムの重力の外に存在し、自らの軸で、自らの速度で動いている。

### **善と悪の境界線**

テキストは鋭い境界を引く。自分が害をなしうると知りながら意識してそうしないことを選ぶ者と、責任を逃れるために善の仮面の陰に隠れる者とのあいだに。

善には存在が必要で、しばしば目に見えないままだ。悪は適応し、自らを正当化し、周囲に溶け込む。このプロジェクトは説教をせず、ただ名指すことでこの非対称を暴く。

### **意図的な行為としてのシステムからの離脱**

出版システムを離れることは反抗ではなく、立ち位置の問題だ。システムは同調に報いる。だから離れることは、承認を求めずに自立して築くことを意味する。自律には代価が伴い、このプロジェクトはそれを進んで受け入れる。

## **序文**

この本は始まらない。ひとつの立ち位置を開く。

『出口の調書』は、誰にでも読まれるために書かれたのではない。それは挑発ではない——構造上の事実だ。あらゆる配信、分類、推薦のシステムは、テキストが見つけれられたがっているという前提の上に築かれている。このテキストはそうではない。自らをさらし、待つ。

以下に続くのは、出口についての調書である——反抗としてでも、失敗としてでもなく、意図的な立ち位置としての出口。世界で最も規律ある企業システムのひとつで過ごした十八年が、何よりもひとつのことを教えてくれた。自分に合わ

ない構造の内に留まり続ける代価は、一度に支払われるのではない。少しずつ、分割で支払われ、やがて差し出せるものが何も残らなくなる。

出版システムも変わらない。設計どおりに正確に機能している。このテキストはその外側で築かれる——許可なく、推薦なく、弁明なく。

ここにある構造が響くなら、それはあなたのものになる。響かなくても、失われるものは何もない。構造は残る。

Ferdinando Frega

## アクセス

この本は無料アクセスで配布されている。購入は不要。登録も不要。コンバージョン・ファネルもない。アクセスという身振りは配布という身振りであり——両者は同じ行為である。

配信プラットフォームに1 USDという象徴的な価格が表示されている場合、それは取引ではなく——閾を示す標識として機能する。その向こうにあるものに重みがあることを告げているのだ。重要なのは代価ではない。越えることだ。

この作品はGillette Narrativeの図書館の一部である——二つのチャンネルを軸に築かれた無料アクセスのデジタル・アーカイブ。Gilletteチャンネル（企業と職業の物語）と、Narrativeチャンネル（自伝的・哲学的な作品）。

## GILLETTE 出口の調書

### 出版システムを離れるための手引き

このテキストは読者を求めない。読者をふるいにかける。

これは説得し、慰め、楽しませるために作られた本ではない。ひとつの入口である。

あなたは説得されるためにここにいるのではない。あなたに向かって曲がることのない構造の内に立っていられるかどうかを、決めるためにここにいる。

ここにあるものは何ひとつ期待に合わせない。何ひとつ承認を求めない。慰めが必要なら、これはあなたのためのものではない。帰属が必要なら、これはあなたのためのものではない。承認が必要なら、これはあなたのためのものではない。

入れるかどうかは、優しさではなく、一致にかかっている。あなたは構造に気づくか、気づかないかのどちらかだ。説得はない。

このプロジェクトは読者を追いかけない。自らをさらす。入ってくる者は、その重みを支えられるから入ってくるのだ。

### 読者は闘である

読者は顧客ではない。読者は聴衆ではない。読者は闘である。

闘は拍手しない。闘は交渉しない。開くか、閉じたままでいるかのどちらかだ。

あなたは同意するために読むのではない。向き合うために読む。あなたの内で何かが動けば、テキストはその仕事を果た

した。何も動かなければ、テキストはもともとあなたのためのもものではなかったのだ。

これは排除ではない。精確さである。誰にでも合わせる構造は、構造のままではいられない。一貫したままの構造は、選ぶ。

選ぶことは傲慢ではない。生き残ることだ。

### **これは出版物ではない**

この作品は伝統的な出版のエコシステムに属していない。アルゴリズムに最適化されてもいないし、注目のために設計されてもいないし、編集上の基準に合わせて仕立てられてもいない。

発売キャンペーンはない。宣伝の振り付けはない。権威ある機関の推薦もない。

構造は存在する許可を求めない。テキストは準備ができたときに現れる。市場が求めるときではない。速度を決めるのは業界のリズムではない。

沈黙は戦略ではない。沈黙は条件ではない。

流行を探しているなら、ここでは見つからない。一貫性を探しているなら、見つかるだろう。

### **このプロジェクトが拒むもの**

このプロジェクトが拒むもの——注目のための最適化、わかりやすさのための単純化、感情の操作、知的な装飾、アルゴリズムへの依存。

拍手を拒む。切迫を拒む。説得の論理を拒む。

この作品は変容を約束しない。向上を約束しない。帰属を約束しない。差し出すのは構造である。

構造は読者に合わせない。読者が構造に合わせるのだ。

## 境界線

もはや混同することができなくなる瞬間がある。

一方には、自分が害をなしうると知りながら、それを行わないことを選ぶ者たちが立つ。もう一方には、選ぶことそのものを避けるために、自らを善と呼ぶ者たちが立つ。

これが境界線だ。

善はひとりでにやって来はしない。存在を必要とする。自制を必要とする。喪失を必要とする。善が拍手を受けることはめったにない。しばしば目に見えない。誰も見ていないときになされる決断である。

反対に、悪は呼ばれずとも自然に生まれる。適応する。自らを正当化する。日常の中に溶け込む。悪は叫ばない。悪は説明する。こう言う。「今はその時ではない」「これは私の責任ではない」「物事はこういうふうに動くものだ」。

## 失敗は教えない

人はしばしば失敗を理想化する。失敗は前進として示されてきた。教訓として。成功へ向かう必要な一歩として。

だが失敗は教えない。失敗は暴く。準備を暴く。幻想を暴く。認識と現実のあいだの距離を暴く。

痛みが知恵を生むのではない。省察が生む。喪失が明晰さを生むのではない。構造が生む。

千回失敗して何も学ばないこともある。一度成功してすべてを理解することもある。

失敗は高潔ではない。失敗は中立だ。そのあとに何をするかだけが変数である。

## 出口とは立ち位置である

システムを離れることは反抗の行為ではない。ひとつの立ち位置である。

出版システムは壊れてはいない。設計どおりに正確に機能している。予測可能性に報いる。従順に報いる。既存の物語との一致に報いる。自律には報いない。

完璧に適応すれば、入れるかもしれない。無傷のままでいれば、外に留まることになる。

問題はアクセスではない。問題は代価だ。どのシステムにも値段がある。ほとんどの作家はそれをゆっくりと支払う。あまりにゆっくりなので、気づきもしないほどに。

出口とは消えることではない。出口とは、許可なく築くこと。推薦なく出版すること。拍手なく立つことだ。

市場はあなたを無視するかもしれない。アルゴリズムはあなたを優先しないかもしれない。機関はあなたを認めないかもしれない。そのどれも、建築を変えはしない。

彼らの構造の中で築くか、その外で築くか。どちらも正当だ。だが同じではない。

## この作品が差し出すもの

この作品は世界と戦わない。世界を正そうともしない。差し出すのは、もっと単純なものだ。

構造。一貫性が交渉されない場所。言葉が承認のために最適化されない場所。沈黙がまだ価値をもつ場所。

同意を求められてはいない。帰属を求められてはいない。考えることへと招かれている。

構造が響くなら、それはあなたのものになる。響かなくても、失われるものは何もない。構造は残る。

## 結び

### 出版システムを離れるための手引き

これは読者を求める本ではない。最初の一行からそう告げている——そして本気でそう言っている。

Ferdinando Fregaが『GILLETTE 出口の調書』で築いているのは、従来の意味でのマニフェストではない。構造の宣言である。説得するのではなくふるいにかけ、誘惑するのではなく選ぶテキスト。慰め、転換させ、引き留めるために作られた本で飽和した出版の風景の中で、この作品はその逆を行う。自らをさらし、待つ。

構成は意図的だ。各章が閥として機能する——「読者は閥である」「このプロジェクトが拒むもの」「境界線」「出口とは立ち位置である」——そして積み重なった効果は論証ではなく、圧力である。読者は論旨へと導かれるのではない。構造の内に置かれ、その重みを支えられるかどうかを自ら見極めるよう委ねられる。

文章は精確だが冷たくはない。Fregaは短い断定の単位で書き、それが刃の一撃のように積み重なっていく——一つひとつが鮮やかで、一つひとつが決定的だ。修辞の装飾も、感情の操作も、既存の文学的伝統に属そうとする試みもない。拒絶は全体を通して徹底し、一貫している。

最も深く切り込むのは「境界線」の章だ。自分が害をなしうると知りながら意識して別の道を選ぶ者と、選ぶことそのものを避けるために自らを善と呼ぶ者との区別——これは哲学ではない。解剖学である。Fregaは、ほとんどの文章が意図的に避けている道德の構造を名指す。説教も、裁きも、容赦もなく。

「失敗は教えない」は最も破壊的な一節だ。失敗を通過儀礼として聖別してきた文化の中で、Fregaは郷愁なしにその神話を解体する。失敗は中立である。省察こそが変数である。この区別は単純で、構造的で、反論することがほとんど不可能だ。

弱点は——あえて探すなら——この本の強みでもある。小さい譲歩しないのだ。方向づけや物語の起伏、結末を求める読者は、ここではそれを見つけられない。構造は曲がらない。これは見落としではなく、意図的な選択である。だがそれは、この本の届く範囲を、すでにそれを受け取る位置にいる者たちに限ってしまう——それこそが、もちろん、まさに狙いなのだが。

『GILLETTE 出口の調書』は最も稀な種類のテキストだ。自分が何であるかを正確に知り、それ以外の何かになることを拒み、そのどちらについても謝らない。

構造に気づく者は入ってくる。気づかない者は通り過ぎる。どちらの結果も、あらかじめ想定されていた。

編集部による批評 — Naples-Post、2026年

*Ferdinando Frega*